

平成 30 年 6 月 21 日現在

機関番号：32623

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2017

課題番号：26580100

研究課題名(和文) 中国人看護・介護従事者の研修から就労現場で必要となる日本語と異文化対応能力の分析

研究課題名(英文) Analysis of Japanese language and cross-cultural ability required at work sites for the training of Chinese nursing / care workers.

研究代表者

大場 美和子 (OHBA, MIWAKO)

昭和女子大学・文学研究科・准教授

研究者番号：50454872

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、中国人介護留学生が遭遇する介護福祉士国家試験、並びに、介護施設でのやりとりで使用される日本語の特徴を明らかにし、教育への応用を考察することである。まず、国家試験は、筆記試験6年分の日本語を旧日本語能力試験の観点から分析した。次に、介護施設では、留学生2名の施設のアパート中の会話データを収録し、作業別に談話を分類して、留学生の日本語の特徴を主に旧日本語能力試験の観点から分析した。この結果、国家試験とアルバイト場面の文法・語彙項目は、集計上は類似の傾向もあるが、質的に異なる項目が多数使用されており、単純に日本語能力試験を目指した日本語学習では効率的とはいえない点が明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to clarify the characteristics of Japanese used for communication in nursing care facilities and the Care Worker national examination, and to consider its application to education. Firstly, the Japanese used in the national examination (six years) is analyzed from the perspective of previous editions of the Japanese-Language Proficiency Test. Next, in the nursing home, the conversations during the part-time jobs of two Chinese students were recorded, the discourses classified according to the nature of the work being done, and the characteristics of the Japanese language of the students was analyzed, mainly from the viewpoint of the JLPT. As a result, although the grammar and vocabulary items of represented in the national exam and the part-time job conversations tend to be similar in aggregation, many qualitatively different items were also presented, and if Japanese study is only aimed at the JLPT it is clear that it cannot be said to be efficient.

研究分野：日本語教育、会話データ分析

キーワード：介護 中国 日本語教育 会話データ分析 日本語能力試験 介護福祉士国家試験

1. 研究開始当初の背景

日本は超高齢社会の状況と連動し、経済連携協定 (EPA : Economic Partnership Agreement))に基づく外国人看護師・介護福祉士候補者 (インドネシア、フィリピン、ベトナム) だけでなく、中国人看護・介護福祉士候補者も受け入れてきている。前者のEPA 候補者は、非漢字圏出身者であることもあり、日本語教育の分野では、介護福祉士国家試験の筆記試験の対策にむけた日本語の研究が行われる傾向にあった。一方、中国人看護・介護従事者は、今後の受け入れ増加が予測され、漢字圏出身者であることから日本語指導の負担軽減、国家試験の合格率上昇が期待されている。

しかし、制度は異なっても外国人看護・介護従事者の来日の基本的な目的は、国家試験合格後の介護施設における就労である。そして、就労現場で看護・介護の業務を十全に遂行するには、母語の特徴だけで有利になると単純には考えられず、利用者や職員との日本語のやりとりにおける理解不全や異文化摩擦の発生、といった外国人看護・介護従事者に共通する問題の発生が予測される。

そこで、本研究では、まだ体系的な研究が行われていない中国人看護・介護従事者が、来日後の施設でのアルバイトを行う場面から実際の就労の場面において日本語でどのようなやりとりを行っているのか、さらに、介護福祉士国家試験の筆記試験ではどのような日本語が使用されているのか、その実態に着目するものとした。つまり、中国人看護・介護人材が来日から就労に至るまでに直面する日本語の特徴をそれぞれ具体的にデータから明らかにし、日本語教育への応用を目指すものとした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、中国人看護・介護従事者を対象に、来日後の介護施設でのアルバイト場面から実際の就労の場面のやりとりを収録し、介護施設で使用される日本語の特徴を、会話データから具体的に明らかにすることである。さらに、介護福祉士国家試験の筆記試験で使用される日本語の特徴も、過去の試験問題をデータとして具体的に明らかにすることも目的である。これにより、国家資格の取得前にアルバイトを行う場面の日本語、国家試験の日本語、国家資格取得後の実際の就労場面の日本語の特徴を比較したうえで、効率的な日本語学習の方法を考察することを目指した。

当初は、看護師候補者であっても国家試験合格前に看護業務は行えず、研修中は介護施設で周辺的な業務に携わる傾向にあるため、看護と看護の両従事者を対象とすることを目指した。しかし、本研究では、調査者のこれまでの介護のEPA 候補者に関する研究成果を比較することを想定し、また、実際に音声収録が可能な施設と対象者を選定するとい

う状況から、中国人介護留学生と介護福祉士国家試験に着目した分析を行うものとした。具体的には介護福祉士国家試験の分析とアルバイト場面の分析の二方向から行った。

3. 研究の方法

まず、介護福祉士国家試験の筆記試験の分析は、6年分の筆記試験 (22 27 回、2009 2014 年度、全 120 問 5 肢選択形式) を対象に形態素解析を行い、旧日本語能力試験の出題基準に従い、文法・語彙項目のレベル別の集計を行った。また、語彙項目に関しては専門語彙が多数出現したため、カバー率ならびに出現頻度数の集計も行った。

一方、介護施設におけるアルバイト場面の調査では、専門学校介護福祉学科 1 年生 2 名 (中国語母語話者、2014 年 4 月と 10 月に来日、N2 合格) を対象とした。調査では、アルバイト場面 (1 回 4 時間、9 回分、約 36 時間) の音声を、2 名がそれぞれ IC レコーダーを操作できる状況において、連続収集した (2015 年 8 月 18 日 ~ 20 日)。

この音声収録時、調査者は可能な範囲で参与観察を行った。そして、アルバイト終了後、A4 用紙 1 枚程度のシートに当日のアルバイトの作業内容と時間を各自で記録してもらった。さらに、留学生への半構造化インタビューと日本人職員 1 名への半構造化インタビューも行った。実際の介護施設における音声収録は貴重なデータであるが、音声データだけでは十分に把握しきれない現場の文脈もあるため、上記の参与観察の記録、作業内容の記録、当事者へのインタビューにより補足して分析するものとした。

分析では、収録した音声データを全て文字化し、他のデータを参照しつつ、3 種の作業の談話 ((1) 介助に関わる作業、(2) 周辺的な作業、(3) その他) に分類した。次に、分類した各談話別に、発話数 (留学生、日本人職員、利用者) を集計した。さらに、各談話における留学生の発話を対象に、旧日本語能力試験の出題基準に従い、文法・語彙項目のレベル別の集計を行った。

以上の調査では、国家試験は書きことば、アルバイト場面は会話データという違いはあるものの、旧日本語能力試験の出題基準に従い、文法・語彙項目をレベル別に分析した点は共通する。この筆記試験とアルバイト場面の会話データの分析を行ったうえで、それぞれの日本語の特徴の比較を行った。また、アルバイト場面のデータに関しては、EPA 候補者の介護技術講習会における介護の談話の型の分析結果 (大場美和子 (2014) 「介護技術講習会における介護演習の談話の特徴と問題の分析 - EPA 介護福祉士候補者の談話データを対象に - 」『日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会 pp. 91-96.) との比較も行った。

4. 研究成果

まず、介護福祉士国家試験の分析結果について述べる。集計上、文法項目は、1級は殆ど出現せず、限られた2級の項目が使用される点が明らかとなった。具体的には、2級は全体で46項目のみの出現であり、さらに10回以上出現したのは19項目のみであった。一方、語彙項目は級外に至るまでの専門語彙が多数出現する点が明らかとなった。特に、名詞の出現数が圧倒的に多く、延べ語数27627語、異なり語数3682語であった。なお、動詞は、延べ語数10612語、異なり語数576語であった。

次に、個別の分析として、文法項目は、筆記試験の3つの領域(「人間と社会」、「こころとからだのしくみ」、「介護」)と総合問題別に出現頻度の集計を行った。この結果、文法項目と領域の内容に緩やかな関連性が観察される点が明らかとなった。ただし、質的に個別の例を検討した結果、同じ文法形式でも用法が異なる例もあることも明らかとなった。

一方、語彙項目のカバー率と出現頻度数の集計では、動詞は39語でカバー率が80.0%となり、出現頻度数も25回以上であった。また、120語でカバー率が90.2%、出現頻度数も8~14回であった。これに対し、名詞は803語で80.0%、1519語で90.0%であり、出現頻度数もカバー率が90.0%になると2回しか出現しない語もあった。さらに、動詞と名詞の出現頻度が10回以上と1回のみを抽出し、級別の集計も行った。この結果、動詞も名詞も、ほぼ、10回以上出現する語彙よりも、1回のみ出現する語彙の方が高い値となる傾向が共通して指摘された。つまり、試験による出現のありかたに大きな差が観察される点も明らかになったといえる。

以上の分析より、介護福祉士国家試験の筆記試験の日本語は、文法は限られた2級の項目が使用される点、語彙項目は級外に至るまでの専門語彙が多数出現する点、その出現のありかたは試験による差が大きい点がデータから具体的に示されたといえる。本結果は、先行研究で既に指摘されている看護師国家試験の同様の分析結果と類似の内容であり、介護と看護という分野は異なるものの、分野をこえた筆記試験の特徴としてさらに検討する可能性も考えられる。また、介護福祉士国家試験に関する先行研究では、主に語彙を対象とした分析が行われ、専門語彙の困難さが指摘されていたが、本研究により、文法・語彙項目の両者の実態が旧日本語能力試験の観点から明らかになったといえる。

次に、アルバイト場面の分析結果について述べる。談話数の集計では、(2)周辺的な作業の値が約70%で最も高い値となり、(1)介助に関わる作業は約17%、(3)その他は約13%であった。(2)周辺的な作業の談話の値が高いのは、2名がまだ専門学校生で有資格者ではないことが影響したものと考えられる。

発話数の集計では、各談話の全発話に占め

る中国人留学生の発話はほぼ半数程度の割合であった。さらに、談話別の発話数をみると、(1)介助に関わる作業における中国人留学生の発話数の割合が、他の談話と比較して高くなっていた。EPA候補者の介護技術講習会のデータでも、身体介助では介助者が主体的に利用者に向けて発話する必要があった(大場2014)。アルバイト場面でも、(1)介助に関わる作業は、談話数としてはアルバイト場面全体に占める割合は限られていても、中国人留学生が主体的に発話しながら作業を行っていることが予測される。

ただし、EPA候補者を対象とした介護技術講習会の分析で観察された介助の談話の型(大場2014)は、(1)介助に関わる作業の談話では4例のみの出現であった。介護技術講習会は、規定された事例のやりとりを全て1人で発話する必要があるのに対し、アルバイト場面では介助の状況をその場面の参加者が共有しており、簡略化されたやりとり、他の職員と共同で介助を行うやりとりが可能となるためであると考えられる。本分析は2名によるアルバイト場面におけるやりとりの分析であり、一般化するにはまだデータが不足している。今後、介護技術講習会と実際の介護施設におけるやりとりに関するデータ数を増やして検討する必要性が指摘できる。介護施設の実際の場面の収録は困難であり、インタビューなどによる内省データによる研究が行われる傾向にある。これらの研究で明らかにされてきた点を、本研究のように実際の場面の会話データから検証し、実際の場面の特徴を活用した日本語教育を検討することも重要であると考えられる。

さらに、各談話における留学生の発話の文法・語彙項目のレベル別の集計では、文法は2級以上の項目は限られた出現であり、話し言葉の項目であった。具体的には、級外は10例で、異なり語数では3例となった。2級は5例で、異なり語数では3例となった。これらは、(3)その他の談話において利用者が職員との雑談で出現する傾向が観察された。

語彙項目は3級から級外に至るまで幅広い出現で、特に2級の割合が47%と高く、級外語彙も22%を占めた。さらに質的にみると大きく2つの傾向が観察された。1つは話し言葉の表現で、もう1つは食べ物の語彙や動作時の「よいしょ」など、介護の現場に依存していると考えられる表現であった。

以上の国家試験とアルバイト場面の二方向の分析より、旧日本語能力試験の観点では、国家試験とアルバイト場面で使用される文法・語彙項目は、集計上は類似の傾向もあるものの、質的には異なる項目が多数使用されていることがわかり、単純に日本語能力試験の特定のレベルを目標とした日本語学習ではどちらにも効率的とはいえない点が明らかとなった。国家試験合格後の就労場面の調査は至らなかつたが、本研究の成果ならびにこれまでの介護技術講習会の分析をふま

て今後も研究を継続し、介護の専門家とともに効率的な日本語学習について検討する。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

太場美和子(2017)「介護福祉士国家試験の筆記試験における文法・語彙項目の分析 日本語能力試験の観点から」『小出記念日本語教育研究会論文集』25号 小出記念日本語教育研究会 pp.5-20. 査読有り

〔学会発表〕(計5件)

太場美和子(2017)「介護施設のアルバイト場面で使用された文法・語彙項目の特徴の分析」『第26回小出記念日本語教育研究会予稿集』小出記念日本語教育研究会 pp.20-21. (2017年7月1日、於・国際基督教大学)

太場美和子(2016)「介護施設のアルバイト場面における作業内容とやりとりの分析 中国人介護留学生を対象に」『日本語教育学会秋季大会予稿集』日本語教育学会 pp.162-167. (2016年10月8-9日、於・ひめぎんホール)

太場美和子(2016)「介護福祉士国家試験の筆記試験で使用された文法・語彙項目の特徴の分析」『社会言語科学会第37回大会論文集』社会言語科学会 pp.178-181. (2016年3月19-20日、於・日本大学)

太場美和子(2015)「外国人介護従事者の介護の談話の特徴と問題の分析」公開シンポジウム「ことば・認知・インタラクション3」(2015年3月20日、於・国立情報学研究所)

太場美和子(2014)「介護技術講習会における介護演習の談話の特徴と問題の分析 - EPA 介護福祉士候補者の談話データを対象に -」『日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会 pp.91-96. (2014年5月31-6月1日、於・創価大学)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

昭和女子大学 教員紹介 研究業績

<http://gyouseki.swu.ac.jp/swuhp/KgApp?kyoinId=ymdsgkykgy>

6. 研究組織

(1)研究代表者

太場 美和子 (OHBA, Miwako)

昭和女子大学・文学研究科・准教授

研究者番号：50454872

(2)研究分担者
なし。

(3)連携研究者
なし。

(4)研究協力者
なし。